

No32

🔍 全訳

人類の進化的過去の遺産とは、子どもが生まれた後に広範な脳の発達が起こるという事実である。他の生物は、特定の環境に適した身体と心を含む遺伝的遺産をもつが、人間は環境にさらされながら成長する脳をもっている。脳の発達と環境は相互に作用し合う。子どもは、複雑なパターンを理解し、多様な環境から学ぶ能力をもって生まれてくる。環境との相互作用が子どもの脳を形づくり、その学習の可能性を、子どもが実際に住んでいる社会に合わせて狭めていくのである。

🔍 第1文

A legacy of humans' evolutionary past is the fact that extensive brain development occurs after a child is born.

→ 人類の進化的過去の遺産とは、「子どもが生まれた後に大規模な脳の発達が起こる」という事実である。

■ 解説ポイント:

- ✔ A legacy of ~ is …:「~の遺産とは…である」。is を中心とした SVC 文型。
 - ✔ the fact that …:that 節は 同格名詞節。名詞 fact の内容(=どんな事実か)を説明している。
 - ✔ extensive brain development:「広範な脳の発達」。extensive=「広範囲の・大規模な」。
 - ✔ occurs after a child is born:「子どもが生まれた後に起こる」。occur は自動詞。
 - ✔ after a child is born:副詞節。born は bear(産む)の過去分詞形。
 - ✔ 構文全体:SVC(A legacy … is …)。主語=legacy, 動詞=is, 補語=the fact 節。
-

🔍 第2文

Other creatures have a genetic inheritance that includes a specialized body and mind fitted to a specific environment, but humans have a brain that grows while exposed to the environment.

→ 他の生物は、特定の環境に適した特殊な身体と心を含む遺伝的な遺産をもつが、人間は、環境にさらされながら成長する脳をもっている。

■ 解説ポイント:

- ✔ have a genetic inheritance …:「~という遺伝的遺産をもつ」。SVO 文型。
- ✔ inheritance:語源は *in-*(中に) + *hered-*(相続する、血統) + *-ance*(名詞化)。=「血筋の中に受け継ぐもの」。
- ✔ that includes …:関係代名詞節で inheritance を修飾。「~を含む」。
- ✔ a specialized body and mind fitted to …:body と mind が and で並列。

- fitted to ~:「～に適した」。過去分詞の形容詞用法で 直前の a specialized body and mind を 後置修飾。

✔ but humans have a brain …:対比を表す but。2つ目も SVO 文型。

✔ that grows while exposed to the environment:関係詞節で brain を修飾。

- while exposed ~:副詞節で「環境にさらされながら」。本来は while (it is) exposed ~ の S+be 動詞が省略されている。

● S be 省略の他の例

1. Though (he was) tired, he kept working.

→ 「疲れていたが、彼は働き続けた。」

2. While (they were) young, they traveled a lot.

→ 「若いうちに、彼らは多く旅をした。」

🔍 第3文

Brain development and the environment interact.

→ 脳の発達と環境は相互に影響し合う。

■ 解説ポイント:

✔ 複合主語(Brain development and the environment)。

✔ interact:「相互作用する」。自動詞で目的語を取らない。語源: *inter-*(間で) + *act*(行う)
→「互いに働き合う」。

✔ 構文:SV 文型。主語 2つ(複合主語)+自動詞。

🔍 第4文

A child is born with an ability to grasp complex patterns and learn from a wide number of possible environments.

→ 子どもは、複雑なパターンを理解し、多様な環境から学ぶ能力をもって生まれてくる。

■ 解説ポイント:

✔ is born with …:「～をもって生まれる」。SVC 文型(C=前置詞句)。

✔ with an ability to grasp … and learn …:with の目的語が ability。不定詞 to grasp / to learn が並列で ability を説明。

✔ complex patterns:「複雑なパターン」。

✔ a wide number of possible environments:「多くの可能な環境」。形容詞 possible が environments を修飾。

🔍 第5文

Interaction with the environment shapes a child's brain, narrowing its

No32

learning potential to fit the actual community in which the child lives.

→ 環境との相互作用が子どもの脳を形づくり、その学習能力を、子どもが実際に住んでいる社会に合わせて狭めていく。

■ 解説ポイント:

- ✓ Interaction with the environment shapes …:「～が形づくる」。SVO 文型。
- ✓ narrowing its learning potential …:現在分詞の分詞構文で、結果・付加を表す。「そして～を狭める(結果)」。
- ✓ to fit …:目的を表す不定詞。「～に適合するために」。
- ✓ the actual community in which the child lives:関係副詞 in which が community を修飾。「その子どもが住んでいる実際の社会において」。

【3】

第1講 🔍 全訳(本文全体)

子どもが最も知的であるのは、目の前の現実が彼の中に強い注意・関心・集中・没頭——つまり、自分がしていることへの深い「思い」を呼び起こしているときである。だからこそ、私たちは学校の教室や学習活動をできるだけ興味深く刺激的なものにすべきなのだ。それは、単に学校を楽しい場所にするためではなく、子どもたちが学校で知的に行動し、知的にふるまう習慣を身につけるためである。学校における「退屈」への反対理由は、「恐怖」への反対理由と同じである。退屈は子どもたちを愚かにふるまわせるのだ一部はわざと、だがほとんどは仕方なくそうしてしまう。もしこの状態が長く続けば(実際、学校ではそうであるように)、子どもたちは「何かをつかむとはどういうことか」を忘れてしまう——かつてはあらゆるものを、心と感覚のすべてでつかもうとしていたのに。彼らは、人生や経験に積極的かつ力強く立ち向かい、「わかった!」「できた!」と考え、口にする方法を忘れてしまうのである。

第2講 🔍 第1文

A child is most intelligent when the reality before him arouses in him a high degree of attention, interest, concentration, involvement — in short, when he cares most about what he is doing.

→ 子どもが最も知的であるのは、目の前の現実が彼の中に強い注意・関心・集中・没頭——つまり、自分のしていることへの深い思い——を呼び起こしているときである。

■ 解説ポイント:

- ✓ A child is most intelligent when …:SVC 文型。主語=A child, 補語=most intelligent. when 節は時を表す副詞節。
- ✓ A child is most intelligent の the 省略:叙述用法(SVC)で most + 形容詞 は文

脈内の「程度の最上点」を述べる時 the を省くのが慣用的(= be most ... when ~)。「とても」の強意副詞的 most にも近い響き。複数の中で一番という時は、最上級の前に the をつけるが、1人の人や1つの物の中での性質で一番という時には the をつけない。

- ✔ the reality before him:「彼の目の前にある現実」。before は前置詞で「～の前に」。
- ✔ arouses in him …:「彼の中に～を呼び起こす」。arouse A in B=Bの中にAを喚起する。
- ✔ arouse in B A(Aの後置): *arouses in him a high degree of ...* は、長い目的語(A)を文末へ送る重項移動。読みやすさ・リズム調整のために in B を先に置いている。
- ✔ rise / raise / arise / arouse の違い
 - rise(自):上がる・昇る(The sun rises.)
 - raise(他):上げる(They raised their hands.)
 - arise(自):生じる・起こる(Problems arise.)
 - arouse(他):(感情・関心を)呼び起こす(The reality arouses interest.)
- ✔ a high degree of attention, interest, concentration, involvement:名詞の並列(4語)。
- ✔ in short:「要するに」。挿入句。
- ✔ when he cares most about what he is doing:「彼が自分のしていることに最も関心を持っているとき」。
 - what he is doing:名詞節(関係代名詞 what)=「彼がしていること」。

第3講 🔍 第2文

This is why we should make schoolrooms and schoolwork as interesting and exciting as possible, not just so that school will be a pleasant place, but so that children in school will act intelligently and get into the habit of acting intelligently.

→ だからこそ、私たちは学校の教室や学習をできるだけ興味深く刺激的なものにすべきなのである。それは単に学校を楽しい場所にするためではなく、子どもたちが学校で知的にふるまい、知的にふるまう習慣を身につけるためである。

■ 解説ポイント:

- ✔ This is why ⇨ For this reason:「ゆえに～なのだ」。why 節は理由の提示。
- ✔ we should make O C:「OをCにする」。O=schoolrooms and schoolwork, C=as interesting and exciting as possible。
- ✔ as ... as possible:「できるだけ～」。
- ✔ not just so that A, but so that B:「Aのためだけでなく、Bのためでもある」。so that 節=目的を表す副詞節。

No32

✓ will act intelligently / get into the habit of ...: 未来の結果を表す助動詞 will。
get into the habit of ~ = 「~の習慣を身につける」。

第4講 🔍 第3文

The case against boredom in school is the same as the case against fear; it makes children behave stupidly, some of them on purpose, most of them because they cannot help it.

→ 学校における「退屈」への反対理由は、「恐怖」への反対理由と同じである。退屈は子どもたちを愚かにふるまわせるのだ——一部はわざと、だがほとんどは仕方なくそうしてしまう。

■ 解説ポイント:

✓ The case against A: 「A に対する論拠・主張」。ここでは「A に反対する理由」。

the case の多義: 「(事実)状況」「(主張の)論拠」。

- *make a case for A* 「A を支持する論拠を立てる」 / *the case against A* 「A への反対理由」

✓ is the same as ...: 「~と同じである」。SVC 文型。

✓ fear: 「恐怖」。

✓ ; (セミコロン): 二つの独立節を強く関連づける。前半 = 理論、後半 = 結果。

✓ makes children behave stupidly: 「子どもを愚かにふるまわせる」。SVOC 文型 (O = children, C = 動詞原形 behave)。

✓ : *it makes children behave stupidly, some of them on purpose, most of them because they cannot help it.*

- 後半は並置の省略句。省略補完すると:
 - *some of them (do so) on purpose,*
 - *most of them (do so) because they cannot help it.*
- some / most of them = 主語相当句、後続の *on purpose* 「わざと」 / *because* ~ が理由・様態を付加。前の *behave stupidly* を受けて *do so* が省略。

✓ because they cannot help it: 「それを避けられないから」。cannot help it = 「そうせざるにはいられない」。

第5講 🔍 第4文

If this goes on long enough, as it does in school, they forget what it is like to grasp at something, as they once grasped at everything, with all their minds and senses;

→ もしこの状態が長く続けば(実際、学校ではそうであるように)、子どもたちは「何かをつかむと

はどうか」を忘れてしまう——かつては心と感覚のすべてであらゆるものをつかもうとしていたのに。

■ 解説ポイント:

✓ If this goes on long enough:「もしこれが長く続けば」。go on=「続く」。enough は副詞。

✓ as it does in school:挿入句。「実際、学校ではそうであるように」。this(この状態=退屈が続く状態)、does=goes on(長く続く)を受ける代用。

✓ forget what it is like to grasp at something:what it is like to V=「V するとはどうか」。

- what it is like to V=「V するとはどうか」。
 - ここでの it は 形式主語(*It is like to V* の *it*)。what は融合関係代名詞で「~であるところのこと」。
 - like は前置詞(=「~のような状態」)。
 - 例: *What is it like to live alone?*(一人で暮らすってどんな感じ?) / *Tell me what it is like to fly in space.*(宇宙を飛ぶってどんな感じ?)

✓ as they once grasped at everything:「かつて彼らがあらゆるものをつかもうとしていたように」。grasp は本来 他動詞(*grasp the idea*)。grasp at は前置詞 at を伴い「~をつかもうと手を伸ばす/しがみつこうとする」(到達未確定の目標の at)。慣用: *grasp at straws*「溺れる者は藁をもつかむ」。

✓ with all their minds and senses:「心と感覚のすべてを使って」。

✓ 文全体構文:If 節(条件)+主節(結果)+補足節(as 節)。

第6講 🔍 第5文

they forget how to deal positively and aggressively with life and experience to think and say “I see it! I get it! I can do it!”

→ 彼らは、人生や経験に積極的かつ力強く立ち向かい、「わかった!」「できた!」と考え、言う方法を忘れてしまう。

■ 解説ポイント:

✓ forget how to deal ...:「どのように対処すべきかを忘れる」。how to 不定詞で「~する方法」。

✓ positively and aggressively:「積極的かつ力強く」。副詞の並列。

✓ with life and experience:「人生や経験に対して」。

✓ to think and say ...:目的・結果を表す不定詞。「~とすることができなくなるほどに」。

✓ I see it! / I get it! / I can do it!:理解と行動の象徴的なセリフ。

✓ 構文:SVO(forget+how to 不定詞)+補足不定詞(to think and say ...)